

ほなほ歴史通信

第18号

2001. 3. 1

歴史を活かすとは

— 奈良まちづくりセンターの理念に学ぶ —

二〇〇〇年四月一日、地方分権一括法が動きだして地方分権の時代がスタートしました。地域の個性を磨き上げ、住民が「住んでいてよかった」「住み続けたい」と思えるような「まち」を創ることができるとかどうか。自治体の、そして住民の政策形成力と実行力がいよいよ問われることになりました。

「まちづくりの主役は住民である」、よく言われることです。最近でこそ住民参加を謳ったまちづくりが多様な形をとって試みられるようになってきましたが、なおいまだしの感が強いのが現実だと思えます。そのようななか、文字通り住民主導行政支援型のまちづくりを実践しているのが、奈良市の奈良まちづくりセンター（以下、センターと略）です。二月下旬、念願かかってセンターを訪れることができました。

「奈良の歴史的風土、歴史的町並み保存等の歴史的環境保全とそれらを生かした地域振興運動の展開を通じて真の『日本人の心のふるさと奈良』を創生」すること、これを目的にセンターが設立されたのが一九七九年。八四年には法人人格を取得し、さらに九五年には活動拠点となる「奈良町物語館」を開館して

一般市民や学生等にも親しまれる方向で活動の幅を一層広げ、今日に至っています。主な活動の舞台は奈良市の旧市街地の一角で、奈良町と呼ばれる地域です。この一帯は、江戸時代の末頃から明治時代にかけての町屋の面影を色濃く残しており、迷路のように交錯する小道を歩くとそこかしこで歴史の息づかいが感じられる、そんな独特の雰囲気をもった空間です。

そこで繰り広げられるまちづくりの全貌を紹介できないのが残念ですが、私がセンターから学んだ多くの点のうち一つだけ挙げておくと…。センターは、季刊で『地域創造』という名の機関誌を発行しています。その第四〇号では、センターの理念が次のような文言で示されています。

古くからの「まち」にはその「まち」にあった「くらし」「なりわい」「たたずまい」がある。「まち」には「まち」の「おいたち」をもとに、様々な時代の影響をうけながらまちに住む人々が、はぐくんできた「知恵」「秘密」「記憶」「習わし」が秘められている。

具体的にそれは、まちの地割り、家の作り方、家を構成する要素（屋根、格子、畳）であり、まちかどにたつ道標、お地藏さんであり、様々な商売であり、まちに根ざした伝統文化、お祭り、生活の文化、生活様式でもある。（中略）

「私たちは、何をまちに遺すのか。何を次の世代に引き継ぐのか」、「意識的に何を、引き継ごうとしているのか、無意識に何を遺しているのか」こんなことにあらためて思いを馳せてみることも必要ではないか。

心引かれる一文です。地域の歴史を明らかにし、それを今日のまちづくりに活かす際の考え方が端的に示されているように思えてなりません。さて、ここ大子町の場合、個性につながる「知恵」、「秘密」、「記憶」、「習わし」とは？（斎藤）

八溝嶺神社の遠鳥居について①

飯村尋道

八溝山は「白雲推積、雨逆しまに降り、溪呼び、峯心ひ、三國（磐城、下野、常陸）に響く、陰暗幽冥、妖鬼棲み、人跡全く絶つ、俗稱して『やみぞ』と云う、役行者、山上に大國主命を祀り、八溝嶺神社の基を開く。（中略）海拔三百四十一丈余、磐城、下野、常陸の三國に誇る、棚倉、黒羽、水戸の三城主、造営修理を行ふ。」（東白川郡誌）とある。

更に、「三代將軍家光の慶安元年には義公光圀水戸藩主が棚倉藩主に謀り頂上に壯嚴なる神社を造営し、一の鳥居は黒羽藩主が建立奉納した。」（浅川遠鳥居記念碑）とある。また、三代將軍家光より高七石の御朱印を賜ったことや、「陸奥国白川郡北郷八ヶケ村、南郷五ヶケ村、下野国那須郡二十六ヶケ村、常陸国依上郷四二ヶケ村の崇敬者、夏秋の二季御供料として米麦を応分に奉納する例となり維新まで続いた。」（茨城県神社誌）

このように八溝嶺神社は徳川將軍家の厚い庇護のもと水戸藩と棚倉藩が社殿を造り、一の鳥居は黒羽藩が建立することが慣例となり、神域は広く氏子及び崇敬者は三県下に跨がっていた。故に、八溝山を遥拝する遠鳥居（一の鳥居）が、棚倉、黒羽、水戸の領内各郷村に建立された。建立場所については、復元され現存するものを除いては、確たる資料はなく、文献や口碑・巷説、古老の記憶などに頼る他はない。

棚倉藩領内には今の棚倉町大梅と塙町石井に、黒羽藩領内には今の黒羽町南坊に、水戸藩領内には今の太子町浅川と大生瀬と池田にそれぞれ遠鳥居が造られた。

【浅川の遠鳥居】

常陸国久慈郡浅川村磯部平（太子町浅川）にある。和田坪にある今の鳥居は、長山六郎氏を中心に地元有志が昭和五十七年

に再建したものである。元は、今の磯部平住宅の火の見やぐら付近にあったが、明治三十五年の暴風雨で倒壊した。

霊峰八溝の眺めは浅川が天下一品である。しかも「白川郡北郷八ヶケ村、南郷五ヶケ村、那須郡二十六ヶケ村、依上郷四二ヶケ村の広い氏子範囲で浅川は殊に熱心」（茨城県神社誌）な土地である。それを裏づけるのが真三神社の蔵に保管されている遠鳥居の扁額である。

氏子総代の稲葉さんの案内で蔵に入り扁額を拝見する。扁額は、縦一米二四釐、横八十釐で漆に金箔が塗られ、大きさとい造りといひを寄せ付けない見事な扁額である。

表に『八溝山』、裏に『嘉永元申十一月十五日造立 鳥居額 寄進 浅川村中 願主長山三石工門 額主武士佐兵衛、太子下金沢村庄兵衛』他に『世話人・庄屋・組頭・氏子』らの名前が鮮明に彫られてある。

嘉永元申は一八四八年である。

「鳥居八黒羽領主大関氏代々建立」（雨宮端亭『美ち帥』）と言われるが、この扁額からは黒羽藩との関係を伺い知ることができない。しかし、この重厚かつ豪華な扁額から浅川の遠鳥居が如何に壯大であったかが想像できる。

因に、明治三十五年の暴風雨とは「小石大の大雨が樺を落とすように斜に飛んで来て、強風の為に久慈川の水は上流へ上流へと逆流し、各戸では四斗臼や土俵を屋根からぶら下げて家屋の倒壊を防止しようとした。それでも、大沢の根渡神社や生瀬の小学校など家屋の倒壊は数知れない程だった」（霞五郎『保内郷十史おらが在所』）というから、浅川の遠鳥居が倒壊したのは、おそらくは、この暴風雨だったのだろう。

（太子町立浅川小学校勤務）

齊昭公乱行す (二)

一一

桜岡滋弥

徳川齊昭の側室の数は記録に残るものだけでも九名に及んでいる。そこに正室文明夫人を含めた一〇名の女性との間に男二十二名、女十五名の子女をもうけている。「茨城県史料近世政治編I徳川昭武家譜」

側室と子女の数においては十一代將軍家齊のそれとは比較にならないが、その家齊の女の一人が齊昭の兄で水戸八代藩主齊脩(なりのぶ)の簾中になっていたのである。

彼女の名は峰姫(みねひめ)、家齊の四十人にも及ぶ側室の中の一人、お登勢の方が母であった。

文政十二年(一八二九年)十一月、江戸小石川の水戸藩上屋敷が火災をおこし、峰姫は実家である江戸城吹上御殿へ避難、藩主齊脩は駒込の中屋敷に一時転居した。

この間に齊脩は侍女のお蓮と関係し妊娠させた。このスキヤンダルを吹上で耳にした峰姫は嫉妬に狂い、お蓮を折檻、彼女は布団部屋で舌をかみ自殺した。峰姫は不妊で、そのため殿(との)の子を身ごもつた女は絶対に許せないのである。

齊脩はこれが原因でノイローゼ気味となり翌年十月に死去し、規則に従い峰姫は髪を下ろして峯樹院(ほうじゅいん)と号し、里帰りして浜御殿に住んだ。「幕府祥胤伝」

齊脩はこの時点では後継を公表していない。藩の江戸家老の一人榊原淡路守(新蔵照覧八百石)は、幕府老中小野出羽守忠成(沼津藩主、五百石、旧田沼派)に相談し、家齊の子で三卿清水家を継いでいる恒之允齊朋(つねのすけなりとも)を水戸家に入れようと計画した。

將軍家の若君を後継者に迎え入れれば石高が加増されるとの計算が藩家老にはあったと思われる。

恒之允の母は峰姫と同じくお登勢の方で、峰姫は自分の弟が御三家水戸を継ぐとの計画に大いに賛成した。

この風評が国許に伝わると、藤田東湖等いわゆる齊昭擁立派が憤激し、大挙して江戸に登った。

ところで峰姫は水戸家に嫁ぐとき、將軍家の姫君ということもあって、大勢の供揃いで小石川屋敷に入ったが、その供の一人に上臈(じょうろう・典侍の位を持つ)唐橋(からはし)がいた。

この唐橋に手を着けたのが、当時部屋住だった敬三郎こと後の齊昭だった。唐橋の主人峰姫は大いに怒り、彼女を墮胎させ京都の実家に返してしまふ。

唐橋の実家は正三位高松季実(たかまつとしざね・三十石三人扶持)という公家である。峰姫の齊昭に対する憎悪の念は強く、彼は江戸城大奥から総スカンを食い、あまつさえ十五代將軍となる一橋慶喜の西の丸入りを喜ばない地盤ができた。〔渋沢栄一・徳川慶喜公伝〕

齊昭はこのような中で、兄齊脩の遺言「朶雲片々(だうんへんぺん)」と、清水恒之允の病死(生まれつき盲目だったという)により、水戸九代藩主となった。

藩主となった齊昭は、すぐさま京都の実家に返されていた唐橋を呼び戻し、今度は水戸城内に住まわせた。

齊昭は藩政改革に着手、御定府として参勤交代がないので、追鳥狩りや領内巡視と称して幕府に帰国願いを出して何度もお国入りをしているが、それは唐橋に会うのが目的だったと「燈前一睡夢」は伝えている。

同書の作者は大谷木忠淳なる人物で、彼の祖父藤左衛門は峰姫の用人をしていたことがあり、祖父の話聞いてまとめ

たもの、と作者はいっている。

斉昭とそのブレーンによって打ち出された藩政改革は將軍家慶から高く評価され、將軍自ら毛抜形太刀と鞍鎧（くらあぶみ）、黄金百枚を斉昭に与えている。

一方、峰姫や大奥は斉昭御乱行のスキャンダルを大奥だけにとどめおかず、將軍の耳に入れた。

斉昭はすぐさま駒込屋敷に謹慎を命ぜられ、嗣子慶篤が家督を継ぎ、後見として三連枝が藩政を監視、斉昭は藩政にタッチできなくなつた。

〔水戸藩資料別記〕などは、幕府は斉昭の藩政改革を危険視し、神仏分離、蝦夷地開発計画、追鳥狩、弘道館の土手を高くしたこと、寺院破却等がけしからぬとの理由で斉昭は失脚したとしている。

それならば、何故將軍家慶は以前には斉昭の藩政改革を高く評価したのか。斉昭が謹慎させられた本当の理由は彼の乱行にあることはまず間違いない。

斉昭の乱行はその後も収まることなく、その触手は息子慶篤の簾中にも及び、その簾中は姫君を残して自殺するといふ事件を起こしたことは前述の通りである。

斉昭の藩政復帰には、簾中文明夫人の影の力が大きく、我々下々の働きなど何の役にも立たなかつたと、水戸藩士高橋多一郎はその著〔遠近橋（おちこちばし）〕に書いている。

嘉永六年（一八五三年）アメリカのペリー提督が六隻もの船団を率いて浦賀沖にやつて来るというショッキングな事件がおき、幕府は斉昭を必要とし、ようやくにして彼は政治の表舞台に立つ。井伊大老の出現まで江戸城に君臨するのである。

終わり

【編集後記】

今年の天子の冬は、文字通り冬らしい冬でした。ある時の気温は、氷点下十度以下にも達した日が何日もありました。一刻も早い、春の日のぬくもりの到来が待ち望まれます。

「ほない歴史通信」第十八号をお届けします。

今号には、浅川小学校に勤務する飯村尋道さんから長年の研究成果の一コマを、私たちのこの「通信」に執筆寄稿をお願いしました。長年の蓄積を踏まえて、天子町の象徴の一つである八溝山、それを信仰の対象の山としてとらえ、茨城・栃木・福島の子三県にある遙拝所遠鳥居の八溝山扁額に光を当ててもらいました。ここに登場する扁額は、いずれも未だその詳細が明らかにされておりません。今後の飯村さんの研究に待つところ大ですが、その成果は追々この「通信」に書いていただくことにいたしましょう。

（吉成）

編集人

斎藤典生（茨城大学人文学部）

野内正美（茨城県立歴史館）

石井喜志夫（元 教員）

小澤 圀彦（天子町教育長）

吉成 英文（天子町社会教育課）

井上 和 司（天子町税務課）

編集発行

遊 中 〇 〇 〇

天子町立中央公民館歴史資料室 付

久慈郡天子町大字池田 二六六九番地

三九三五

〇五五二二六